

『正法眼蔵聞解』 「全機卷聞解」における

「壮士の譬喩」理解について

岩 永 正 晴

一 はじめに

道元禪師（一一〇〇～一一五三）撰『正法眼蔵』「全機」には「壮士の臂を屈伸するがごとく」という譬喩が用いられている。本稿ではこの譬喩を仮に「壮士の譬喩」と呼び、この譬喩に対する『正法眼蔵聞解』による理解を確認する。この場合の『正法眼蔵聞解』とは岸沢惟安師（二八六五～一九五五）によって斧山玄鈿（一七一～一七八九）の提唱筆記であると比定されているものを指す。面山瑞方（二六八三～一七六九）の提唱筆記としての『正法眼蔵聞解』とは異なる。

結論から述べれば、『正法眼蔵聞解』による「壮士の譬喩」理解は『影室』すなわち『正法眼蔵聞書抄』に依拠していると考えられる。そしてその理解は、『正法眼蔵』による引用の意図をよく捉えているのではないかと推測する。以下、卑見を述べる。

二、「壮士の譬喩」の出典

『正法眼蔵』「全機」には以下の文があり、筆者が傍線を付した句を「壮士の譬喩」と呼んでおく。

圓悟禪師克勤和尚云、生也全機現、死也全機現。

この道取、あきらめ参究すべし。参究すといふは、生也全機現の道理、はじめ・をおはりにかかはれず、盡大地・

盡虚空なりといへども、生也全機現をあひ罣礙せざるのみにあらず、死也全機現をも罣礙せざるなり。死也全機現のとき、盡大地・盡虚空なりといへども、死也全機現をあひ罣礙せざるのみにあらず、生也全機現をも罣礙せざるなり。このゆゑに、生は死を罣礙せず、死は生を罣礙せざるなり。盡大地・盡虚空 ともに生にもあり、死にもあり。しかあれども、一枚の盡大地、一枚の盡虚空を、生にも全機し、死にも全機するにはあらざるなり。一にあらざれども異にあらず、異にあらざれども即にあらず、即にあらざれども多にあらず。このゆゑに、生にも全機現の衆法あり、死にも全機現の衆法あり。生にあらず、死にあらざるにも全機現あり。全機現に生あり、死あり。このゆゑに、生死の全機は、壯士の臂を屈伸するがごとくにもあるべし、如人夜間背手摸枕子にてもあるべし。これに許多の神通光明ありて現成するなり。

「壯士の譬喩」はごく短い時間を表す譬喩として諸経に用いられる。例えば『長阿含経』卷第一（大正蔵一、一〇頁中）には以下の用例がある。

我欲至無造天上。時我如壯士屈伸臂頃。於此間沒現於彼天。

*

我、無造天上に至らんと欲す。時に我、壯士の臂を屈伸するが如き頃、この間に没し彼の天に現す。

また大乘の『大般涅槃経』卷第二十七（大正蔵一二、七八六頁下段）には以下の用例がある。

即與大衆發王舍城。譬如壯士屈伸臂頃。至舍衛城祇陀園林須達精舍。

*

すなわち大衆とともに王舍城を發し、譬えば壯士の臂を屈伸するが如き頃に舍衛城祇陀園林の須達精舍に至れり。

なお黄泉無著（一七七五～一八三八）撰『正法眼藏涉典統紹』は、『觀無量寿経』（大正蔵一二、三四五頁下段）における「聞此事已尋即命終。譬如壯士屈伸臂頃。即生西方極樂世界（この事を聞き已りて尋に即ち命終せば、譬えば壯士の臂を屈伸するが如き頃に即ち西方極樂世界に生ず）」という用例と、『思益梵天所問経』卷第一（大正蔵一五、三四頁中段）の「譬如壯士屈伸臂頃。到娑婆世界釋迦牟尼佛所（譬えば壯士の臂を屈伸するが如き頃に、娑婆世界釈迦牟尼仏の所に到る）」という用例を指摘している。

いずれも「極めて短い時間に速やかに」何事かが行われることを譬えるために用いられている。

『正法眼蔵』「全機」の後半は圓悟禪師また仏果禪師と諡された克勤（一〇六三〜一一三五）の語「生也全機現、死也全機現」が拈提されている。出典は『圓悟仏果禪師語録』卷第一七「拈古」（大正蔵四七、七九三頁下段）で、「道吾弔慰」と呼ばれる古則を拈提した際の頌の句である。

擧。道吾漸源至一家弔慰。源撫棺木云。生耶死耶。吾云。生也不道死也不道。源云。爲什麼不道。吾云。不道不道。行至中路。源云。請和尚爲某甲道。若不道則打和尚去也。吾云。打即任打。道即不道。師拈云。

銀山鐵壁有什麼階昇處。山僧今夜錦上鋪華。八字打開。商量這公案去也。

生也全機現。死也全機現。

不道復不道。箇中無背面。

直下便承當。不隔一條線。

逼塞大虚空。赤心常片片。

*

挙す。道吾と漸源と一家に至りて弔慰す。源、棺木を撫して云く、「生か、死か。」吾云く、「生とも道わじ、死とも道わじ。」源云く、「什麼としてか道わざる。」吾云く、「道わじ、道わじ。」行きて中路に至りて源云く、「請う、和尚、某甲が為に道わんことを。もし道わずんば則ち和尚を打ち去らん。」吾云く、「打つことは即ち打つに任せども、道うことは即ち道わじ。」師（克勤）拈じて云く、

銀山鐵壁、什麼の階の昇る処かあらん。山僧、今夜錦の上に華を鋪き、八字に打開して、この公案を商量し去らん。生もまた全機現、死もまた全機現。

道わじ、また道わじ、箇中に背面することなし。

直下に便ち承当し、一條線を隔てず。

大虚空に逼塞し、赤心常に片片たり。

「壯士の譬喩」は『圓悟録』卷第十四「法語上」所収の「示世祥禪人」（大正蔵四七、七七八頁下段）でも用いられている。なお傍線は筆者が施した。

透頂透底全機大用。譬如壯士屈伸臂頃。不借他力。則生死幻翳冰消。金剛正體獨露。

*

頂に透り底に透る全機大用、譬えば壯士の臂を屈伸するが如き頃に、他の力を借りず、則ち生死の幻翳は氷のごとく消え、金剛なる正体は独り露る。

いま試みにこの文に対する筆者の理解を述べるならば以下の通りである。

山の頂から海の底にまで行きわたる全機（すべての働き）・大用（大いなる働き）によって、喩えば力強い若者が腕を曲げ伸ばしするようなわずかな時間に、他者の力を借りることなく、すぐに生死輪廻というまぼろしの影は氷のようにとけ、金剛石のように砕けることのない正体だけがあらわになる。

前掲の通り、『正法眼蔵』「全機」において「壯士の譬喩」は、「このゆゑに、生死の全機は、壯士の臂を屈伸するがごとくにもあるべし、如人夜間背手摸枕子にてもあるべし」と、用いられていた。

「如人夜間背手摸枕子」は道吾円智（七六九〜八三五）の語で、『宗門統要』巻第七を典拠として『正法眼蔵』「観音」において拈提されている。いまこの語を含む雲巖曇晟との問答を『正法眼蔵』「観音」によつて掲げておく。⁽²⁾

雲巖無住大師、問道吾山修一大師、大悲菩薩、用許多手眼作麼。道吾云、如人夜間背手摸枕子。雲巖曰、我會也、我會也。道吾云、汝作麼生會。雲巖曰、徧身是手眼。道吾云、道也太殺道、祇道得八九成。雲巖曰、某甲祇如此、師兄作麼生。道吾云、通身是手眼。

*

雲巖無住大師、道吾山修一大師に問う、大悲菩薩、許多の手眼を用いて作麼かせん。道吾云く、人の夜間に背手して枕子を摸するが如し。雲巖曰く、我會せり、我會せり。道吾云く、汝作麼生か會する。雲巖曰く、徧身是れ手眼。道吾云く、道うことは也た太殺道う、ただ八九成を道い得たり。雲巖曰く、某甲はただかくのごとし、師兄作麼生。道吾曰く、通身是れ手眼。

「如人夜間背手摸枕子」の一応の意味については、道元禪師が「たとへば、人の、夜間に手をうしろでにして、枕子を摸索するがごとし」と示される通りであろうし、「用手眼は、如人夜間背手摸枕子なり」とあつて、千手千眼の大悲菩薩が手眼によつて衆生を見出だし濟度する働きが「如人夜間背手摸枕子」だと示されている。⁽³⁾

しかし『正法眼蔵』「観音」は難解であつて、私には容易にその拈提に示されるところを認識することはできない。

夜間はくらき道得なり^④

とあるので、暗くて、うしろでにする手（手眼）と探られる枕头（衆生）の見わけがつかない状況が「夜間」であると示そうとなさるのであろう。さらに、「手眼」について種々説示なさった後、

恚麼いはば、手眼菩薩用許多大悲菩薩作麼と問取しつべし^⑤。

と示される。「大悲菩薩用許多手眼作麼」を「手眼菩薩用許多大悲菩薩作麼」と言い換えて、手眼の用と大悲菩薩の体用の分けられず一体である状況が示されていると思われる。

以上は略述であるが、大悲菩薩が千手千眼を用いて衆生を濟度することは能所・体用を越えた働きであるという教えが示されていると、『正法眼蔵』「觀音」本文からそのような認識が得られる。

『正法眼蔵』「全機」において「壯士の譬喩」はこの「如人夜間背手摸枕头」とならべて用いられていた。諸經の用例のように「極めて短い時間に速やかに」何事かが行われることを表す譬喩としてのみ用いられているとすれば、適切ではないように思われる。

『圓悟録』において生死を越え正体を明らかにする「全機大用」の意味を表すために掲げられた「壯士の譬喩」が、『正法眼蔵』「全機」では特に「他の力を借りず」というところに着目し、「如人夜間背手摸枕头」と併せて依用されているのではないか、「如人夜間背手摸枕头」と同様に体用・能所を分かつたない全分なるはたらきを表す譬喩として用いられているのではないかと考える。

三、「正法眼蔵全機卷聞解」における「壯士の譬喩」理解

『正法眼蔵』「全機」に対する提唱は『正法眼蔵聞解』には「正法眼蔵全機卷聞解」と題して収録されている（以下「全機卷聞解」と称する）。『正法眼蔵』「全機」の「壯士の譬喩」と「如人夜間背手摸枕头」に対する提唱部分は以下の通りである。なお振り仮名・送り仮名と傍線は筆者が施した。

○カルガ故ニ、生死ノ全機ハ一生死不ニナルイヘニ全機。全機ト云生ガ生トカタツケバ一方欠ル處ガアル故ニ、全機デハ無ヒ。生死一枚デコソ全機ナリ。○其ノ全機一枚ニシテ離レヌ。譬ヲイハバ、○壯士一丈夫、ワカモノガ

臂ヲ屈伸スルガゴトク、有ハ即空ニシテ生ト死ト相離レザル、其間糸程モスキ間ガ無イ、間ニ髮ヲイレイズ、了簡

『正法眼蔵聞解』「全機卷聞解」における「壯士の譬喩」理解について（岩永）

毛届カヌモノ。其コハ外ノモノハ知ラヌ、其ノ法ヲ行ズル當人計リ知ルコトハ、人ノ夜間ニ枕子ヲ摸ル如ク、一切ノ諸明ヲ借ラズ自己ノ佛知見ヲ照ス。生死機關ノ働ク處ハ、自ノ佛知見ヲ照スノミ。

この文章に対する筆者の理解を示すならば以下の通りである。

○そうであるから、「生死の全機」は、生と死はふたつのものではないから全機「なのである」。全機としての「生」が「死と対立する」「生」であると一方にだけ偏ると、「死という」もう一方が欠けているところがあることになるから全機ではないのである。生死がひとつであつてこそ全機である。○その全機がひとつであつて「生と死のふたつに」離れない。譬喩を述べるとすれば、○「壯士の臂を屈伸するがごとく」「と示されている」、「壯士」とは「丈夫（二人前の男）」「のこと、つまりは」若者が腕を曲げ伸ばしするように、「有」がすなわち「空」であつて生と死とがたがいに離れない、その「生と死の」間には糸ほどの「わずかな」すきまがない、間に髪の毛をも容れない「それ程の隙間もない」。そこ（その実態）は他人には分からない、その教法を修行する本人だけが知ること「であつて、それを譬えるとすれば」、「人ノ夜間ニ枕子ヲ摸ル如ク」、「他者による」すべての光の照らす働きを借りることとはない、自分自身の仏知見「の光明」で「みずから」照らすのである。生死というはたらき（全機）がはたらくところにおいては、「修行する」自分自身の仏知見で照らし出すばかりである。

傍線部のように「生死一枚デコソ全機ナリ」「其ノ全機一枚ニシテ離レヌ」ことを表す譬喩が「壯士の譬喩」であるという理解を「全機卷聞解」は示している。しかし壯士が臂を屈伸することが、なぜ生死が離れないことの譬喩になるのかはわからない。『正法眼藏聞解』はあくまで提唱の筆録であり、筆記が不十分であろうと思われることはままある。『正法眼藏聞解』が『正法眼藏聞書抄』を踏まえていることを、かつて指摘したことがある。恐らくここでも、『影室』すなわち『正法眼藏聞書抄』の注を踏まえていると思われる。

まず『正法眼藏聞書』には次のようにある。

圓悟禪師段

壯士ノ臂ヲ屈伸スルニ生死ヲ喩フ。此臂ノ如ク全機ハ可心得ナリ。全機ノ上ニ生モアリ、コレ一時ノ説法ナリ、全機ノ上ニ死モアルベシ、是又一時説法ナリ。ヒトツノ臂ヲノベカヅムル、カヅメタリツルヒヂナレバトテ、ノベタルトキ聖礙ナシ、ノベタリツルヒヂナレバトテカガムル時聖礙ナキガ如シ。一顆明珠也全機現、一隻眼也全機現、

光明也全機現トモ云ベシ。諸法ナル時節ニハ迷悟佛衆生モアルガ如ク、全機ノトキ諸法アルベシ。

壯士が腕を伸ばしても曲げて腕は腕である、曲げた腕だとして伸ばしたときに差し障りはなく、伸ばした腕だとして曲げた時に差し障りはない、そのように全機の上に生も死もそして諸法もあるという理解が示されている。

また『正法眼蔵抄』はこれを踏まえ次のように述べる。

上ニハ、生ニアラズ死ニアラズ只全機現有トイヒ、コトニハ、全機現ニ生アリ死アリト云、是ハ如前云、生死全機ノアマリニ親切ナル道理ノ時例、アチコチ取違テイハルルニ無相違ナリ。壯士ノ臂ヲ屈伸スルトハ、屈伸ト云モ臂ノ上ノ道理ナリ、ソレヲ暫伸トモ屈トモ仕ヘドモ非別物、屈伸共臂ナルベシ。

相対するものが実は親密一体であることを表す場合に、道元禪師は「アチコチ取違テ」（言葉を入れ替えて）表現なさった例があり、この場合も同様であつて、生死と全機が「アマリニ親密」であるので、前には「生にあらざ死にあらざるにも全機現あり」と言い、この部分では「全機現に生あり死あり」と仰せになつたに違いないと理解している。腕を曲げる、伸ばすと言つても、ともに「腕ノ上ノ道理」であつて別のことではなく、曲げるのも伸ばすのもいづれも腕であると、「壯士の譬喩」を説明している。

「全機卷聞解」が「壯士の譬喩」を「ワカモノガ臂ヲ屈伸スルガゴトク、有ハ即チ空ニシテ生ト死ト相離レザル、其間糸程モスキ間ガ無い、間ニ髪ヲイレズ、了簡モ屈力ヌモノ」と説明したのは、『正法眼蔵聞書抄』を踏まえるのだと推測する。なお、『聞解』が提唱の際に依拠する面山瑞方（一六八三〜一七六九）の『正法眼蔵品目述贊』も『正法眼蔵涉典録』も、天桂伝尊（二六四八〜一七三五）の『正法眼蔵弁註』も、特に「壯士の譬喩」に同様の言及はない。

むすび

以上、『正法眼蔵』『全機』における「壯士の譬喩」の典故と意味を探り、「全機卷聞解」における「壯士の譬喩」の理解が『正法眼蔵聞書抄』の注を踏まえていることを述べた。

そして冒頭に述べた通り、『正法眼蔵聞解』による「壯士の譬喩」理解は『影室』すなわち『正法眼蔵聞書抄』に依拠しており、その理解は、『正法眼蔵』による「壯士の譬喩」引用の意図をよく捉えているのではないかと推測する。

注

- (1) 河村孝道・角田泰隆編校註『（本山版訂補）正法眼蔵』（大本山永平寺刊、二〇一九年、三一六頁）
- (2) 注1同書、二六二頁。
- (3) 注1同書、二六四頁。
- (4) 注1同書、二六四頁。
- (5) 注1同書、二六五頁。
- (6) 『永平正法眼蔵蒐書大成十七』（大修館書店刊、一三七頁下段）
- (7) 拙稿「斧山玄鈿の参学について（三）——『正法眼蔵聞解』における『影室』依用の展望——」（『宗学研究』第四三号、平成一三年三月所収）参照。
- (8) 『永平正法眼蔵蒐書大成十二』（大修館書店刊、二八二頁）
- (9) 注8同書、二七六頁。

※本稿で示した『大正新脩大藏經』の用例の検索には「S」大正新脩大藏經テキストデータベース」を利用しました。

〈キーワード〉『正法眼蔵』「全機」、『正法眼蔵聞解』、『正法眼蔵聞書抄』、『圓悟録』 譬如壮士屈伸臂